

石造遺物を用いた 民俗文化の再構成の試み

宮城県気仙沼市鹿折地区を事例として

Reconstruction of Folk Cultural Studies Focused on Data-base of
Monuments Made of Stone : A Case Study of Shishiori District in
Kesen-numa City, Miyagi Prefecture

川村清志・小池淳一・葉山 茂
萱岡雅光・山内宏泰

KAWAMURA Kiyoshi, KOIKE Jun'ichi, HAYAMA Shigeru,
KAYAOKA Masamitsu and YAMAUCHI Hiroyasu

はじめに

① 記念碑から石造遺物へ

② 金石碑に関する資料

③ 震災後の現況調査について

④ 調査資料のデジタル化と資料のアーカイブ化の試み

おわりに

【論文要旨】

本論は、東日本大震災の被災地域における石造遺物の総合的なアーカイブ化に向けた試論に位置づけられる。以下では、震災記念碑に集中した関心を修正し、石造遺物一般を生活世界と親和性の高い位相で捉えなおすことと、震災によって寸断された民俗文化研究の資料や研究環境をもう一度切り結び、それらの基盤を復旧し、整序したいと考える。その具体的な資料として以下では、気仙沼市の市史編纂の過程で実施された金石碑に関する調査資料を取り上げる。市史編纂に関する資料は、津波の被害からは免れたものの、現在も未整理の状態が続いている。

地域に残る金石碑、顕彰碑などの石造遺物全般については、その多くは現況さえ確認されていない。地区の有志によって再建されたものがある一方で、野ざらしのまま放置されているものも多い。震災による被害は言うに及ばず、大規模な復旧工事によって周囲の環境が激変したり、遺物自体が存廃の危機に立たされたりするケースもある。これらの石造遺物の現況を総体的に把握することが喫緊の課題である。以下では気仙沼市鹿折地区をケーススタディとして、石造遺物のデジタルアーカイブ化とそのための課題について検討していくことになる。

【キーワード】 石造遺物、金石碑、アーカイブス、デジタル化、東日本大震災

はじめに

本論は、東日本大震災の被災地域において、震災記念碑や金石碑、顕彰碑などの石造遺物の総合的なアーカイブ化に向けた試論に位置づけられる。その構築と運用に向けての試行として以下では、特定地域の金石碑についての資料のデジタル化と公開に向けての方途を提案する⁽¹⁾。

東日本大震災後、津波記念碑については、比較的早い時期に現況調査が行われた〔北原・卯花・大邑 2012〕。その後、三陸地域を含めた全国の津波・震災記念碑のアーカイブスも作成されている。自治体によっては、文化財として指定・登録しようとする動きもあるが、未だに被害状況が改善されていない地区も多い⁽²⁾。その後の復旧工事の余波で、新たな危険にさらされている記念碑も見られる。

他方で金石碑、顕彰碑などの石造遺物全般については、その多くは現況さえ確認されてこなかった。地区の有志によって再建されたものがある一方で、野ざらしのまま放置されているものも多い。記念碑と同様に、大規模な復旧工事によって周囲の環境が激変したり、遺物自体が存廃の危機に立たされたりするケースもある。これらの石造遺物の現況を総体的に把握することが喫緊の課題である。本稿では宮城県気仙沼市鹿折地区をケーススタディとして、石造遺物のデジタルアーカイブ化とそのための課題について検討していくことになる。

①……………記念碑から石造遺物へ ― 本稿の目的

本論の目的は大まかには以下の2点に収斂する。最初の目的として、震災記念碑に集中した関心を修正し、石造遺物一般を生活世界と親和性の高い位相で捉えなおしたいと考える。震災後、被災地の震災記念碑については、マスメディアはもちろん、多くの研究者が関心を示してきた。はじめに記した北原系子らは、震災後の1年足らずの間に宮城県の津波記念碑の現況を報告していた。目時和哉は、岩手県を中心として明治と昭和の大津波の後に作られた石碑を「近代津波モニュメント」と位置づけ、過去の被災経験を継承しようとする意図を読み解こうとしている〔目時 2013〕。また、森康成は、青森県の津波記念碑の所在を紹介しつつ、今時の津波についての聞き取り内容を報告している〔森 2012〕。その後、アーカイブ化の営みは、地域を三陸域に拡大して整備されていった。2014年に国土交通省のホームページが開設した「津波被害・津波石碑情報アーカイブ」では、青森県、岩手県と宮城県の計317の津波石碑についての情報が掲載されている。他方で新聞を始めとするマスメディアは、津波記念碑より下に家を建てなかったことで被害を免れた岩手県姉吉地区の事例などを、繰り返し紹介してきた〔川村 2013〕。確かに震災を一過性の脅威としないために、過去の記憶を呼び起こし、刻まれた碑文から教訓を読み解こうとする意図は理解できる。ただその点を強調しすぎ、震災記念碑だけを抽出して過剰な意味を付与することは、地域ごとの固有の位置付けを損なうことになりかねない。

文化人類学者の吉田憲司は、震災記念碑の震災の記憶と教訓の所在について述べている。彼は日本全国に存在する津波の石碑、銘板、文書などを紹介しつつ、それらが有する記憶装置としての意義とその限界について指摘している。それらは「後世の人間に警鐘を鳴らす重要な装置」だが、「記

憶の継承装置として有効に機能するとは限らない」[吉田 2012:150] という。同様に川島秀一は、津波の記憶の仕方について、「体に刻まされた知識」を重視しながら、それらを継承するための実践の事例を紹介している [川島 2012]。このことを裏返せば、単に記念碑を建立するだけでは、十分でないということである。記念碑と人びとの実践が重なりあったときに、そこに刻まれた教訓、あるいは知識は、はじめて意味をもつものとして理解されることになる。

このように震災記念碑をどう位置づけるかは、時期により、また、研究者によっても見解が分かれている。特定の視点や価値観からのみ捉えることは、津波記念碑が設置されている場所の実相を見えなくする危険性をもひめている。実際、地域社会の日々の景観に配されるのは、震災記念碑だけではない。しばしば震災記念碑の周囲には複数の金石碑や顕彰碑が建てられている。震災記念碑が、神社の境内やその近隣に設置されることも少なくない。そのような地域の信仰や集合的な記憶を想起させる事物の一つとして、津波記念碑は位置づけられる。

よってここで必要な作業は、これら生活世界の景観の一部を構成し、集合的な記憶に培われた石造遺物を、総体として現状把握することである。もちろん、石造遺物に限る必要さえ、本来ないのかもしれない。今後、御神木のような樹木や林、複合的な素材を用いた人工物や建築物、場合によってはいかなる指標も失われながら、何らかの記憶が共有される場所やその地名についても検討すべき時が来るだろう。以下では、生活世界を構成する多くの事物を再構築するための一里塚として、石造遺物を対象にしたいと考える⁽³⁾。

次にこの試みは、我々の研究会が当初から掲げていた目論見と合致するテーマになりうる。本研究会は、震災によって失われた研究の再統合を目指してきた。被災地では、複数の博物館や資料館が大きな被害を被った。多くの人的資源が失われ、混乱した状況の中で研究活動を攪乱させられた。同時に震災によって多くの資料が失われたり、破損したりしている。多方面で寸断された研究環境をもう一度切り結び、それらの基盤を復旧し、整序するための方途と実践こそが、この研究会の目指したことであった。

そこで注目したのが、気仙沼市の市史編纂の過程で実施された金石碑に関する調査資料である。市史編纂に関する資料は、津波の被害からは免れたものの、現在も未整理の状態が続いている。確かに金石碑の所在や内容については、すでに市史の資料編において、その一覧が紹介されている。しかし、一覧という形式のため、紹介されたデータは限定的なものにならざるを得ない。後に検証することになるが、調査資料に記された内容は、資料編に整序されたデータよりも豊かな内容が記録されている。また、一覧表には、複数のヒューマンエラーによって生じたと考えられる記載上の不備があった。それらを補ううえでもこれらの資料は、震災以前の個々の資料を確認する極めて重要な内容が含まれている。

本論では、震災後の調査によって得られた資料と以前の記録を重ね合わせることで、研究環境の再統合をはかりたい。先行研究や公表された資料だけでなく、過去の綿密な調査の成果を再考し、今日の調査資料をより体系だったレベルに更新できると考える。現地では震災記念碑や複数の石造遺物が、震災による被害に加えて、震災後の復旧工事の過程で損壊したり、所在が移動、時には不明になったりしている。これらの現況調査を適宜、付与していくことで継続的な変化を測定できるアーカイブを作成することができると考えている。

②……………金石碑に関する資料

(1) 市史に掲載された一覧表

気仙沼市史の資料編には、地域ごとに金石碑の資料の一覧が示されている。⁽⁴⁾そこでの地域は気仙沼、鹿折、松岩、新月、階上、大島の計6ヶ所に分かれている〔気仙沼市史編さん委員会編1995〕。この気仙沼市史は1998（平成10）年に全巻の発行が完了するが、この時はまだ、唐桑村と本吉町は独立した町村であった。唐桑村は2006（平成18）年に気仙沼市と合併し、本吉町は2009年に編入さ

表1 市史に掲載された金石碑の一覧の抜粋

番号	種子	記号	主要碑文	年号	干支	西暦	備考	所在地
1			南無阿弥陀佛右志趣者為〔法外〕	寛文五年	乙巳	1665	月雪妙口禪定尼	東中才浄念寺
2			南無阿弥陀佛〔法名付〕	寛文十三年	癸丑	1673	六月十日	東中才浄念寺
3			南無阿弥陀佛〔法名付〕	延宝四年	丙辰	1676	十月二十九日	東中才浄念寺
4			南無阿弥陀佛〔法名付〕	延宝五年	丁巳	1677	二月二日 月窓妙庵禪定尼	東中才浄念寺
5			南無阿弥陀佛〔法名付〕 〔蓮華座〕	延宝五年	庚申	1680	十月十四日 照誉智徹信士	東中才浄念寺
6			南無阿弥陀佛〔法名付〕 〔一周忌〕	天和三年	癸亥	1683	十二月二十二日 雪峯妙源禪定尼	東中才浄念寺
7		ひ 日月	□ 〆 □ 〆 □ □ □ □ 〆 夫以〔庚申〕	貞享元年	甲子	1684	十月七日	浪坂 飯綱神社
8			南無阿弥陀佛	貞享五年 〔元禄元年〕	戊辰	1688		上西側 常福寺跡
9			南無阿弥陀佛〔蓮華座〕 〔七回忌〕〔法名付〕	元禄二年	己巳	1689	十一月十八日 香誉宗春禪定門	西八幡前 「狐崎」墓地
10		日輪 月輪	奉供養庚申	元禄三年	庚午	1690	十月二十日	東八幡前
11			奉供養庚申	元禄七年	申戌	1694	十月二十六日	鶴ヶ浦 小松宅
12			南無阿弥陀佛〔蓮華座〕 〔法名付〕	元禄九年	丙申	1696	五月十日 清誉入信士	西八幡前 「狐崎」墓地
13			〔南無阿弥陀佛と推定〕	元禄九年	丙申	1696	興福四世□□	上西側 常福寺跡
14			南無阿弥陀佛〔蓮華座〕 〔法名付〕	元禄十一年	丙寅	1698	四月二十日 楽誉至心信士	東中才 浄念寺
15			南無阿弥陀佛	元禄十二年	己卯	1699	閏九月十六日 長□坊	東八幡前 八幡神社
16		ひ		元禄十五年	壬午	1702	五月十九日 忠永	西八幡前 八幡寺跡
17			南無阿弥陀佛	元禄十六年	癸未	1703	二月十六日	東中才 興福寺
18		日輪 月輪	奉誦已待供養処	宝永元年	甲申	1704	九月二十日	浪坂 「高屋敷テッチョ」
19			奉供養庚申	宝永二年	乙酉	1705	十月吉日 常覚院・□□院	東八幡前 八幡神社
20	○		奉讀誦妙法蓮華經一千 部供養〔蓮華座〕	宝永三年	丙戌	1706	十二月十五日 真性義空庵主	蔵底 駒込沢入口

れている。そのためこれらの地域は当時の市史には含まれていない。

この中で鹿折地区については、計 153 件の石碑が列挙されている。一覧表に整理された項目は、種子、記号、主要碑文、年号、干支、西暦、備考、所在地の 8 項目である。種子には仏を表す梵字が記され、記号には日月や卍などの刻印が記載されている。干支は十干十二支による表記である。また、備考には、ほぼ発願者と建立日の日時が示されている。

例えば、その 1 から 20 番は表 1 のように紹介されている。鹿折地区でもっとも古い金石碑は、近世初期の 1665（寛文 5）年に遡る。それに続く 17 世紀中後期の遺物の多くが、浄念寺とその周囲に残されていた。ちなみに浄念寺は東中才にある浄土宗の寺院である。寺の略縁起などによると、開創は 16 世紀末の慶長年間に遡るとされる。他方で『鹿折村新風土記』は、寺院として一山の伽藍が成就するのは 1670（寛文 10）年頃ではないかと推測している〔村上 1984〕。その時期にやや先立って石碑が存在したことは、寺院の故地を推定するうえでも重要な情報となりうる。ただし古い時期の資料に関しては、後にみる調査カードによって修正の必要なことがわかった。

一覧表は、基本的には年代順に示されているが、例外も見られる。⁽⁶⁾ 年号や所在地についての表記にブレが見られたため、再確認の必要な箇所が複数あった。これらはデジタル化する際に語句の統一や訂正が必要となる部分である。ただ碑文の文字自体が誤字ないしは虚字と考えられるものもあり、カード資料の写真やスケッチ、場合によっては現地での再確認が必要な石碑もある。

(2) 市史編纂の調査資料

金石碑の調査資料は大きく三つに分かれる。まず主要な資料となるのが、石碑一つ一つの調査カードである。このカードは京大式カードと同じ B6 サイズのカードに記録されていた。現在、気仙沼市のリアス・アーク美術館に保管されている。カードは表裏がセットとなって一つの石碑が記録されている。

表面には、「金石碑調査カード」と印字され、右上に資料ナンバーを記す欄がある。番号は、地区番号と調査順と思しき番号、そして、同一箇所での個別番号の欄がある。写真 1 のように鹿折地区は 1 番で、調査順は 157 番、個別番号は 1 となるわけである。

枠内には、種別、写真番号、碑銘、建立年代、建立者、現所在地、記事、調査年月日、調査者の 10 項目が記されている。さらに裏面に回ると写真 2 のように金石碑のモノクロ写真とスケッチ、ならびに測量値が示されている。

金石碑調査カード		地区	調査順	個別
		No. (1.)	(157)	(1.)
種 別	道札供養	写 真 番 号	457	
碑 銘	○奉納大衆勤王日 不道徳供養と推定			
建立年代	明和元年 甲申 (1764) 格目吉辰			
建立者	不明			
現所在地	新坂町一丁目 8-9 菅野宅跡		正面方位	
記 事	鹿折蔵島神社参道にあり。場所不明。碑銘には誤字が多い。			
調査年月日	60.10.15		調査者 山内・川 篤	

写真1 1-157-1調査カード表面

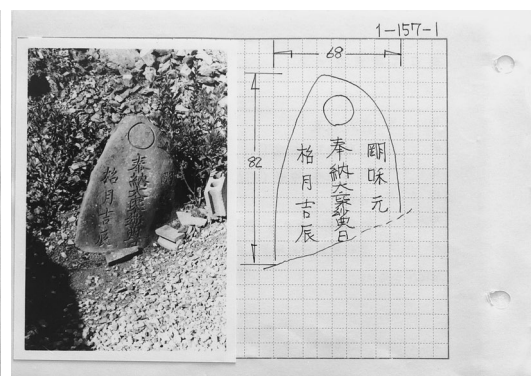


写真2 1-157-1調査カード裏面

表2 カードと市史一覧表の記載項目の比較表

調査カード内容		市史一覧表内容		
カード表面 (カード情報)	調査番号	×		
	写真番号	×		
カード表面 (資料情報)	種別	×		
	碑銘	種子	記号	主要碑文
	建立年代	年号	干支	西暦
	建立者	備考		
	記事	(大部分は省略)		
	現所在地	所在地		
	正面方位	×		
	調査年月日	×		
	調査者	×		
カード裏面	石碑スケッチ	×		
	実寸	×		
	石碑画像	×		

ここで表2のように市史の一覧とカードの内容を参照してみた。両者を照らし合わせると、市史の一覧表の「主要碑文」はカードの「碑銘」に相当する。ただし、一覧表の「種子」は、碑銘に記載されているものが多いが、「記号」については、スケッチの表現や記事の一部を参照したものも見られる。また、カードの「建立年代」が一覧表では、「年号」、「干支」、「西暦」に細分化されている。これらの項目は、互いに要素が重なっているだけに、細分化した方が理解しやすい。他方で「建立年代」に記されていた日時の部分は、建立者と共に、一覧表では「備考」に入れている。カードの現所在地は一覧の「所在地」に相当するが、詳細な場所については省略されることもある。また、この他の項目の多くは、カードと調査の整理目的のためのものが多い。しかし、重要な点として、カードの「記事」に当たる部分が一覧には記されていない。これは、石碑に関する由来や地元での口伝が記されており、きわめて重要な情報である。さらに裏面の写真資料とスケッチについては一切、カットされている。

他にも多くの資料を載せなければならないため、市史の資料編の内容が限定的になることは仕方のないことである。一覧表での掲載となった時点で、文章量の多い「記事」や画像の掲載は見送られたのだろう。しかし、改めて当該地域の文化財のアーカイブ化を進めるならば、これらの調査資料もぜひ加えるべきである。現在、鹿折地区の金石碑の中には、震災によって損壊したり、行方の分からないものさえある。震災という大きな災禍の前後を明示するうえでも、写真やスケッチ、測量値などの資料は非常に貴重であると考えられる。

これ以外にも資料類には、二つの異なった性格の資料が残されている。

一つは、同じ京大式のカードのサイズに記された石碑群の場所を示す模式図である。カードによっては裏面に写真が添付されているものもあった。市内には、寺社の周辺などに複数の金石碑が建立されている場所が存在する。それらの場所の概要を示すために、これらの模式図が作成されたようである。写真3は、東八幡の「八幡神社境内」を表している。正面下の階段を上がるとすぐ左手に「南無阿弥陀佛」の碑があり、社殿の右側には、計6件の石碑が並んでいることが示されている。この八幡社は明治の廃仏毀釈以前は常覚院、あるいは八幡寺と呼ばれ、修験道の羽黒派に属する寺院でもあった[村上1984]。仏教に関連する石碑も、神仏習合の記憶をとどめる遺構である。このような石仏群のカードが、鹿折地区では55枚、記録されている。

もう一つは、これらの金石碑の場所を書き込んだ気仙沼市の住宅地図である。写真4は、鹿折地区の鹿折川流域の八幡前から中才にかけてのページである。複数の数字が赤ペンで書き込まれている。この数字は、先に示した調査順の番号を示しており、調査カードに対応するものである。地図のいくつかの場所には、数字が集まっている場所がある。ページの右下の方の183

と185は、鹿折八幡神社の境内とその周辺に集中した石碑群である。また、右上の186、336、337は浄念寺の境内とその周辺を指している。寺社や各村落の小祠の周辺には、石造遺物が集中する傾向が、地図からも見て取れる。

幸い現状では、これら3種の資料は1ヶ所に保管されている。しかし、それを参照することも統合的に利用することも現状ではむづかしい。仮に整理作業が行われても、機械的な事務作業の場合、各々の資料が異なる場所に保管されかねない。そこで、これらをデジタル化するとともに資料間のリンクづけを行い、全体として参照可能な資料とすることが必要な作業となる。

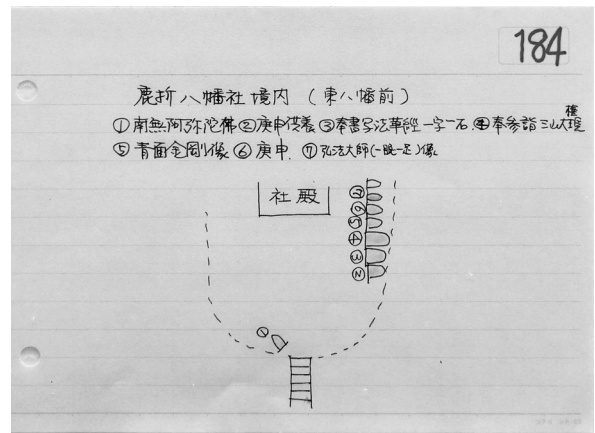


写真3 東八幡境内の模式図

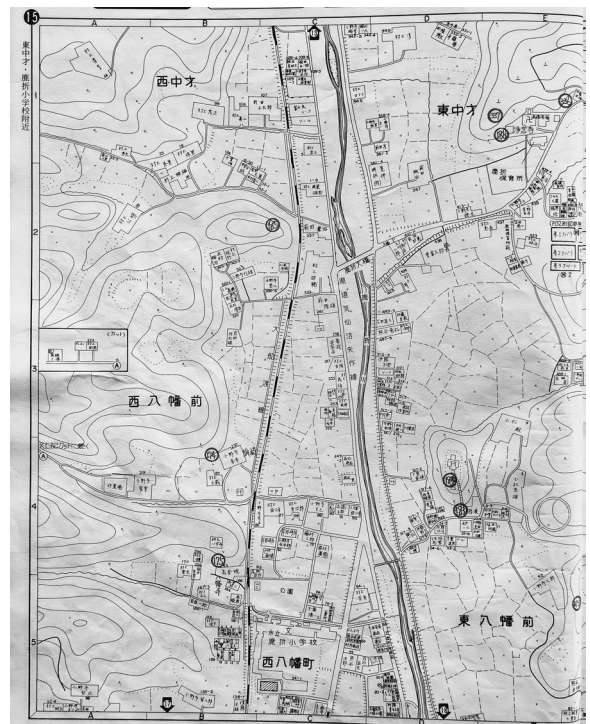


写真4 所在地を記入した住宅地図の例

(3) 市史の一覧表と調査カードの比較検証

個別の調査カードについては、もう一つ注意しなければならないことがある。この調査カードと市史の一覧表との間には、記録されている資料の数に差異があった。既述したように一覧では鹿折地区について153件の金石碑が紹介されている。対して調査カードは169枚分のデータが存在している。一覧表には掲載されていないデータを同定し、新たにデジタルデータに加えておく必要が生じた。さらにこれらのデータが、なぜ除外されたのかについての検証も必要となった。

まず、一覧表とカードを照合していき、表の中に調査カードのナンバーを記入していった。その結果、一覧表に登録されながら調査カードが確認できないものが1枚だけあった。一覧表のナンバー100、「奉書书法華経一字一石塔」である。東八幡の「八幡神社境内」にあったとされる資料である。カードを精査してみると、「八幡神社境内」に関する調査カードは185のナンバーが振られ、計6枚あるはずであった。しかし、これらのカードの中には1-185-3に当たるカードが見当たらなかった。確定はできないが、このカードが紛失した可能性が大きいと考えられる。

次に調査カードのカードナンバーと一覧表とを対応させたうえで、カードのみに存在するデータを抽出した。調査カードから一覧表に相当するデータを書き出したものが表3である。ここから二つの傾向が見てとれる。一つは年代的に1800年代から1810年代に集中していることである。対して石碑の所在地やカードナンバーは分散しており、一貫性は見られない。ということは、年代順に編み直した資料が、編集のどこかの時点で欠落した可能性がある。

もう一つの傾向として、調査カードのナンバーが大きいものが多く、資料収集の時期が遅かったことが指摘できる。さらにカードを確認すると別の特徴が浮かびあがってきた。表4にまとめたように鹿折地区の石碑調査は、約1年半に渡って行われている。調査は1985（昭和60）年の10月15日に始まり、その年の間に130件近い石碑がカード化されている。翌年、翌々年も、断続的に調査

表3 一覧表に記載されていなかった金石碑

主要碑文	年号	干支	西暦	備考	地名	所在地	カード番号
(梵字) 山僧□法印	慶安2	己丑	1649		栄町「南」		390-2
奉供養庚申	享保9	甲辰	1724*	11月20日	浪板	高屋敷テッちょ	252-1
奉庚申供養	宝暦4	甲戌	1754	12月20日	東中才	白山保育所	391-1
奉供養	寛政12	庚申	1800	10月11日	新浜町一ー八ー九		157-3
庚申供養塔	寛政12	庚申	1800		大浦	厳島神社	164-7
奉供養	寛政12	庚申	1800	10月庚申日	上東側根	木戸脇家	192-1
山神供養塔	享和3	癸亥	1803	12月12日	鳥沢入		202-3
金比羅	文化5	辰辰	1808		梶ヶ浦	庭渡神社	167-1
庚申真言(?)	文化5	戊辰	1808		両沢	久須志神社	190-2
庚申塔	文化6	己巳	1809	9月吉祥日	万行沢		163-1
大神宮	文化6	己巳	1809	清明中浣日	上鹿折	行屋脇	194-1
湯殿・羽黒・月山 三山大権現塔	文化7	庚午	1810		東八幡	八幡神社鳥居前	183-3
鳥海山大権現塔	文化7	庚午	1810		東八幡	八幡神社鳥居前	183-5
象頭山	文化7	庚午	1810		上鹿折	行屋	194-3
鹽竈宮供養碑	文化8	辛未	1811		栄町		171-2

* カードには1716年と表記されていたが、享保9年は1724年

が行われているが、1日の調査件数は非常に少ない。調査の中心は他の地域で行われ、新たに報告を受けたり、補足調査が必要になったりした場合に、個別に記録を取っていたものだろう。ほとんどが3件以下の限定的な記録である。

実はここで記載から漏れていた1-251-1は、1986（昭和61）年の最初の1枚であり、1-390-2と1-391-1は1987（昭和62）年の最後の2枚である。ということは、カード整理の段階のどこか、あるいは年毎の整理のいずれかの段階で、最初の資料と最後の資料が抜け落ちた可能性が指摘できるのである。

もちろんいずれの資料も、金石碑の資料として補足すべきものであり、その所在の確認も含めて、震災後の調査が必要であることがわかった。とりわけ、資料1-390-2の栄町「南」の石碑は、1649（慶安2）年の建立とされる。これは鹿折地区では最古の事例であり、気仙沼市全体を見ても2番目に古い。やや特殊な事例のため調査が遅れた可能性もあるが、改めて周知すべき貴重な記録である。

表4 金石碑の現地調査の実施日一覧

年	日時	開始番号	終了番号	件数
1985 (昭和60年)	10.15.	157-1	170-5	35
	10.23.	171-1	176-1	16
	11.5.	183-1	190-12	44
	11.8.	191-1	201-6	33
	11.13.	202-1	204-1	6
1986 (昭和61年)	4.7.	252-1	253-2	3
	7.18.	326-1	326-2	2
	7.30.	334-1	334-2	2
	8.20.	336-1	339-1	14
	9.30.	184-7		1
	10.24.	362-1		1
	11.13.	364-1		1
	11.21.	372-1	373-1	6
1987 (昭和62年)	2.24.	199-5		1
	3.17.	173-3		1
	3.30.	390-1	391-1	3

③……………震災後の現況調査について

(1) 現況調査の過程

本研究会が震災後の石造遺物の現況調査に最初に着手したのは、2012（平成24）年の秋以後である。震災から1年半が経過していた。この時点では、鹿折地区を含めた気仙沼市の震災記念碑の調査が中心であった。すでにこの当時、震災記念碑は、マスメディアでも繰り返し取り沙汰され、研究者たちも各地の状況やその意義について議論していた。しかし、そこで示される「現況」が、気仙沼市内では、遅延した情報となりつつあった。研究者によって交わされる議論が現地から乖離するなかで、より現場に見合った資料を提示しなければならないと判断した〔川村2013〕。

同時に津波記念碑の周囲にある多くの金石碑や顕彰碑の存在にも気づかされた。次節で紹介する小々汐の事例のように、記念碑よりも金石碑が優先的に復旧される事例にも出会い、地域における重要性を検討するようになった。しかし、金石碑の調査は、あまり進捗をみない間に時間だけが経過していった。ようやく2014年の初め頃に作業を開始し、15年度の後半に大方の調査を終えた。調査は決して体系だったものではなく、他の目的に付随することが多かった。とりあえず主要な調査地である小々汐を起点として四ヶ浜の石造遺物を記録したうえで、鹿折川沿いを中心に上流へと向かっていくというコースをとった。⁽⁸⁾八幡神社周辺までの調査は比較的スムーズに行ったが、中才地区やそれより川上の地域については、確認のできなかった金石碑もあった。当時は調査カードの存

在に気づいておらず、一覧表だけでは、正確な場所を確認できなかったことも大きい。また、それらの地域が津波による被災地域ではなかったため、現況に大きな変化はないとみなし、調査が後回しになった側面もある。

この後も、震災後の復旧工事によって鹿折地区の多くの場所、とりわけ四ヶ浜地区は大きく変貌しつつある。気仙沼大島への渡橋工事とそこに直結する湾岸道路の工事は、山を削り谷を埋め、浪板や小々汐をはじめとするかつての集落の場所さえ消し去っていく。石造遺物の置かれていた場所が土地の嵩上げ工事で失われたり、道路工事で削られたりする場面にも遭遇した。震災はもちろん、震災後の地域の変貌の只中で、景観のメルクマールとなりうる石造遺物を記録し、保存の手立てを考える一助にしなければならない。そのため工事作業が進む2017年度以後に、もう一度、悉皆調査を試みる必要性が生じている。

(2) 現況調査の意義

以下では、これまでの調査で震災以前のデータから、何らかの更新が必要な事例について紹介したいと考える。これらの事例は震災以前と以後で変化が見られるもの、震災以後の復旧過程で状況が変化したもの、さらに震災とは関係なく市史調査以前と以後での変化が見られるものがある。

①震災前後で変化が見られる石造遺物

四ヶ浜では、津波で倒壊し、その後、元の場所に復旧された事例として、小々汐地区の金比羅大権現碑(1-165-1)がある。小々汐の多くの家屋は、小さな湾に沿って建っていた。碑はその湾の突端部分、地元では松鼻と呼ばれるあたりにあった。家屋と崖の間に鎮座していたが、周囲の家屋は津波にのまれて軒並み流出している。金比羅大権現の碑の横には金花山(1-165-2)の碑もあり、碑の前には小さな鳥居も建てられていたが、全て津波による倒壊を免れなかった。

この金比羅碑は、1894(明治27)年に小々汐の家が合同で勧請したものである。以来、毎年10月10日を祭日として地区の祭事が催されてきた。それ以前に建立されていた金花山の碑は慶応元年(1865)年の銘があり、金比羅碑の建立に合わせて併設されたと考えられる。いずれも漁業に携わっていた小々汐の家々にとって、大切な信仰の対象であった。そのため、倒壊から2年を経ずに、この碑は小々汐の有志によって立て直されることになる。震災後も、旧暦8月15日の鹿折八幡神社のおさがり(神輿の渡御)と旧暦10月10日の金比羅大権現の祭りでは、村の人々が集まって生米(オハネリ)をまき、この碑にお参りする姿を見ることができる。写真5は2014年の金比羅大権現の祭礼時の様子である。碑の前では、鹿折八幡神社の神主による神事が行われている。

ちなみに、金比羅碑の前には、道路を挟んで昭和の津波記念碑が設置されていた。ちょうど、小々汐の舟溜りの入り口のあたりである。この記念碑も東日本大震災の津波で横倒しになっている



写真5 金比羅大権現での神事(撮影 尾形健氏)



写真6 164-2r 大浦 2014



写真7 164-6r 大浦 2014



写真8 164-3r 大浦

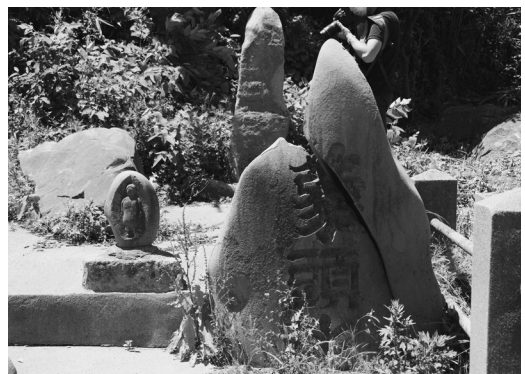


写真9 164-3r 大浦 2014

た。現在も地元では、保存と復旧に向けての取り組みが続けられている。ただし地域の人々にとってより喫緊の課題は、この金比羅大権現の碑を復旧することであったことは、記憶に留めておいていいだろう。

小々汐と同様に鹿折川の河口付近にあった金石碑は津波の影響を強く受けている。津波で損壊し、現在まで復旧の目処が立っていない石碑群もある。その一つが、小々汐の隣の大浦にある厳島神社参道脇の事例である。この神社の参道の手前には、金石碑や顕彰碑が複数建立されていた。その中で金石碑については7基が記録されていた。2014年の夏の段階で7基のうち4基が健在、2基が倒壊、1基が大きく損壊していた。倒壊した2基については、調査カードの付加情報が非常に有用であった。すなわち、資料1-164-2の金比羅大権現の碑と1-164-6の塩竈宮供養塔は、それぞれ写真6, 7のような状況にあった。共に正面が見えないため、石碑の形状と側面または裏面の文字記録から各々の石碑を確認しなければならなかった。また、1-164-3の象頭山の碑は、震災以前から大きな亀裂があったことが確認できた(写真8, 9)⁽⁹⁾。しかし、震災後は明らかに亀裂部分が大きくなったことも伺える。震災による小さな損傷や破損は、他の石碑でも散見される。

②震災後の諸工事によって変容を被った石造遺物

大浦より川上に移動すると、浪板の飯綱神社が右手の丘の上に見えてくる。ちょうど浪板橋が架橋されていたあたりである。川を挟んで神社の向かい側には、「地藏堂」があり、石造の地藏尊と

ともに資料番号 1-159-1 の庚申塔があった。この地蔵堂は津波によって完全に破壊されたが、地蔵と庚申塔は早い時期に元の場所に戻された（写真10）。著者の一人の川村は、この庚申塔の損傷が激しかったことから、これが他所から津波で運ばれてきた可能性について言及していた〔川村 2013〕。しかし、この市史の調査資料によって、もともと地蔵と庚申塔がこの地にあり、訂正すべき内容であることがわかった。⁽¹⁰⁾

もっとも震災後、この地蔵と庚申塔をめぐる環境は目まぐるしく変化していく、2012（平成24）年の冬の時点では野ざらしだったが、程なく簡易な屋根が設けられていた（写真11）。さらに2013年の9月には、後部が補強され、花が添えられ、卒塔婆さえ置かれていた。それはかつての地蔵堂を想起させる姿だったのかもしれない（写真12）。しかし、鹿折川の周辺は、嵩上げと護岸工事が重なりあい、周囲の風景は一変していく。それに先立って地蔵尊と庚申塔も他所に移されることになった。2014年になり、地元情報からこの二つの石造遺物は、鹿折地区東中才の浄念寺に移設されていることを知った。写真13が現在の様子である。本堂（観音堂）の西脇に安置され、その横には寺の地蔵堂も並ぶ。寺が預かり先となるケースは、阪神淡路大震災でも見られることであった。⁽¹¹⁾

現在、所在の分からなくなった石造遺物もある。先の庚申塔からさらに川上へ200メートルほど移動すると小さな橋がある。その橋のたもとには、昭和の大津波の石碑とともに早池峯山供養碑（1-158-1）が建っていた。高さが約2.3メートル、幅が約1.1メートルの大きな石碑である

このあたりも川を遡上した津波により浸水した地域である。そのため、津波記念碑は土台ごと横倒しになっていた。対して隣に立っていた早池峯山供養碑については損傷があったものの、とりあえず健在であった。写真14は、2012年の12月の状態である。写真の右側が早池峯山供養碑であり、



写真10 庚申塔と地蔵（2012.12.21撮影）



写真11 庚申塔と地蔵（2013.3.27撮影）



写真12 庚申塔と地蔵（2013.9.6撮影）



写真13 庚申塔と地蔵, 浄念寺（2014.9.16撮影）



写真14 中みなとの早池峯山供養碑と津波記念碑



写真15 馬頭観音の碑（行屋）

左側の横倒しになっているのが、津波記念碑の土台である。しかし、その後の嵩上げ工事のために、一帯は埋め立てられてしまい、記念碑、供養碑共に所在の確認ができていない。

③震災とは関係なく市史調査後に変化の見られる石造遺物

さて、震災による損壊や移動、復旧とは異なる動きもみられる。その一つが上鹿折の「行屋」脇にある石造遺物群である。この周辺は海岸部から離れており、津波の影響もなかった。「行屋」は市史資料では、1 大神宮（1-194-1）、2 雷神供養（1-194-2）、3 象頭山（1-194-3）と三つの馬頭観音碑（1-194-4～6）が確認されていた。写真15のように三つの馬頭観音碑はかなり小ぶりで、古いものでも1897（明治30）年、残りの二つは昭和に入ってた



写真16 新しい馬頭観音碑（行屋）

てられたものである。今回、新たに調査を行ったところ、もう一つ別の馬頭観音碑が建立されることが確認できた（写真16）。碑には平成元年と記されており、市史の調査後に新たに建立されたことがわかる。⁽¹²⁾ 言い換えればこの場所には、石碑への信仰やそれを支える社会的な紐帯が、近年まで継承されていたことになる。

その意味では、この「行屋」の事例は、最初に記した小々汐の事例と同じく金石碑が生きられた民俗文化と連続性をもつことを示す事例となるだろう。

④……………調査資料のデジタル化と資料のアーカイブ化の試み

これまで1980年代に市史編纂の際に行われた調査資料と、震災後の再調査の概要について記してきた。現在、これらの金石碑に関する資料のデジタル化を実施している。作業自体の行程は大きく分けて二つある。一つは、市史の調査カードのデジタル化作業である。カードを1枚ずつやや高精度のスキニングにかけ、読み取られた画像に資料ナンバーと地名を付与する。資料ナンバーは調査カードの番号に準じている。ただし、既述したようにカードは裏表が1枚の資料となっている。そこで表の基本的な文字資料については、カード番号にSを加え、写真とスケッチが中心の裏面にはRを加えて一対の資料として捉えることにした。例えば最初に紹介した写真1は、カード1-157-

1Sであり、同じく写真2は、1-157-1Rということになる。この裏表のデータをデジタル上で結合させることも考えたが、今は、その作業には至っていない。

同時に前節で紹介した現況調査の資料の整理も行っている。これらは、市史調査カードの番号に準拠しつつ、撮影年月日を加えていった。また、行屋の事例のように新たな資料が確認された場合には、調査地番号を新たに振り分けることにした。行屋の場合は1-194-1～6の番号が振られていたため、新たな馬頭観音碑は1-194-7とした。

この作業と並行して他の2種類の資料についてもデジタル化の作業を行った。石碑類が集まっている場所のカードについては、個別の金石碑と同じく1枚ずつデジタル化を行った。

次に所在地が記された住宅地図については、そのままデジタル化すると一般的な利用がむづかしくなる。そこで地図に記された所在地データを、インターネットのグーグルマップに落とし込むことに決めた。ここからが第2のデジタル化作業になる。グーグルマップの利用の先例として、阪神淡路大震災の記念物についての詳細なデータがネット公開されており、そちらを参考にした⁽¹³⁾。

本来、このような資料データについては、研究機関や研究グループが独立したアーカイブを構築し、保存と活用を行うべきかもしれない。しかし、現状の著者たちのグループには、そのようなアーカイブスを構築するための予算と技術の両方が備わっていない。そのような環境が整うのを待つのではなく、既存のサイトを用いることで、地元の一般の人々を主なターゲットとした情報の発信を優先したいと考えている。

既存のサイトを利用することには、いくつかのメリットと同等のデメリットが存在する。まずメリットとしては、専門的なデータベースの構築に必要とされる経費と知識を節減できることである。おそらく、独自のデータベースを専門的な業者に依頼すると、数百万円の経費が必要となる。逆にそれらを自前で構築しようとするれば、技術の習得のために年単位の時間と複数の研究者の人的資源を消費しなければならない。その両方の目処が立たない現状では、既存のサイトの機能をできる限り利用することが、数少ない選択肢となっている。

次に既存のサイトでは、種々の削除、付加、訂正を含めたデータの更新が簡易である点を指摘できる。専門的に構築されたデータベースは、その更新や変更が極めて困難なため、経費や専門的知識の問題が再び生じる。対して既存のサイトを利用する限りにおいては、ヒューマンエラーによって生じる単純な誤植の訂正から、新資料の発見によるデータの更新までが、比較的容易に遂行することができるのである。

もちろん、デメリットもある。まず、既存のサイトでは、ユーザーの意思とは無関係に仕様の変更が行われるかもしれない。せっかく整序したデータが、仕様の変更によって閲覧画面が見にくくなったり、最悪の場合、閲覧が困難になることも予想される。この危険性を根本的に取り去ることは難しく、既存のサイトの最大の難点とも言える。

次にセキュリティの問題がある。誰もが容易にアクセスできるということは、公開されるデータが濫用される恐れも増える。更新が容易であるということは、悪意を持って改竄しようとする者にとっても、コンテンツを操作しやすいことを意味している。改竄の可能性については、サイトが有するセキュリティに依存せざるを得ないのが現状である。また、濫用されることで問題が生じる個人情報や著作権に関わりそうな情報を選別し、一定のフィルターをかけることが必要とされるだろう。

ただこの議論を進めていくとサイトでは何をどこまで公開すべきなのか、公開されたデータの運用はどのように行われるべきかの指針を立てる段階へと展開するだろう。ただし、データ運用の問題は、たとえ独自のアーカイブを構築しても、課題となることに変わりはない。このような課題は、メディアにおける公共性や情報の共有の問題と密接に関わっている。むしろ、既存のサイトや以下に見る SNS の利用は、近年のオープンサイエンスの流れとも呼応する動きであることを指摘しておきたい。それは、多くのアーカイブスが固守してきた一方向的な情報公開の在り方に、ブリ・コラージュ的な実践によって異議を唱える可能性を孕んでいる。この課題については、最後にもう一度確認したいと考える。

さて、グーグルマップには特定の場所を記録して、そこに地名やコンテンツなどの情報を書き込んだり、画像などを貼り付けたりする機能が備わっている。このマイマップに住宅地図に記載された番号を打ち込み、次にその番号に相当する気仙沼の当該地域の名称を付与する。カードと一覧にズレがある場合には、一覧表の字単位の名称を優先する。ポイントには、次の文字情報を付与することにした。市史の一覧表の基礎データに準拠したものである。

- ①資料番号
- ②碑銘
- ③建立年（元号）
- ④西暦

また、画像資料としては、基本的には、震災後のポイントを俯瞰する画像を掲載することにした。当初、グーグルマップ上に調査カードを含めた複数の画像を掲載する予定だったが、実際の閲覧では、非常に見にくいことがわかった。複数画像をアップロードすると個々のカードの認識もできないため断念した。その代わりに、別のサイトで画像と資料の基本情報をアップロードし、マップの文字情報からリンクを貼って、個々の資料を確認できるようにした。そちらのページには次の画像を付与している。

- (1) 市史調査の石碑配置図のカード
- (2) 個別石碑の調査カードの裏面（複数ある場合には資料番号順に紹介）
- (3) 震災後の現況写真（複数ある場合には年代順に紹介）

(1) は石碑の周辺の環境を把握するうえで重要な資料である。このカードに付随して、石碑群を示す画像が付加されることもある。(2) の調査資料カードは各資料の起点となる位置づけである。ここからの変容過程を示すために (3) 震災後の画像が付与されている。今後、新たに収集された画像があった場合には、適宜、年代順に紹介していきたい。

これらのデータを格納するサイトとして、現在のところは SNS のフェイスブックのページの利用を考えている。フェイスブックのページには特定のテーマごとに写真をアップロードしたり、それらをアルバムとしてカテゴリ化する機能がある。⁽¹⁴⁾ このアルバム機能を利用して石碑群の場所ごとにデータを格納したいと考えている。まず、アルバム名として資料番号と地域名を付与する。そこから先の資料番号に沿ってカードや画像を配置していった。

1 枚のカードでは、個々の石碑の調査カードの裏面を示しつつ、文字情報として次の項目を配置することにした。

- ①資料番号
- ②撮影(調査)日時
- ③碑銘
- ④建立年(干支)
- ⑤西暦
- ⑥建立日時, 施主
- ⑦所在地
- ⑧ノート

これは、市史の一覧表に加えて、調査カードの「記事」と「調査年月日」を加えたより情報量の多いデータとなっている(市史の一覧にある種子, 記号については煩雑になるため省略している)。これに続く震災後に撮影された画像については、①と②, そして、適宜⑧を加えていくことを考えている。

以上のデジタル化の作業を実装した場合の「みえ」について紹介しておこう。ここでは、3節でも紹介した大浦厳島神社のアルバムを参照することにする。

まず、グーグルマップ鹿折全体の石碑の分布からマイマップに進む(写真17)。マイマップに進むと左側の資料ナンバーからと地図上の両方から資料の検索を行うことができる。「マイマップ」をクリックすると次の画面になる。画面の地図の中で、ほぼ中央付近に白い丸で囲われた資料のマークが見える。宮城県造船鉄工(株)と書かれた場所のすぐ下である。これが大浦厳島神社を表している。このように各々のポイントをチェックすると資料マークが浮かびあがることになる。



写真17 グーグルマップに配置された鹿折地区の石碑の場所(抜粋)



写真 18 Facebook のページ上に整理された大浦厳島神社の石碑資料

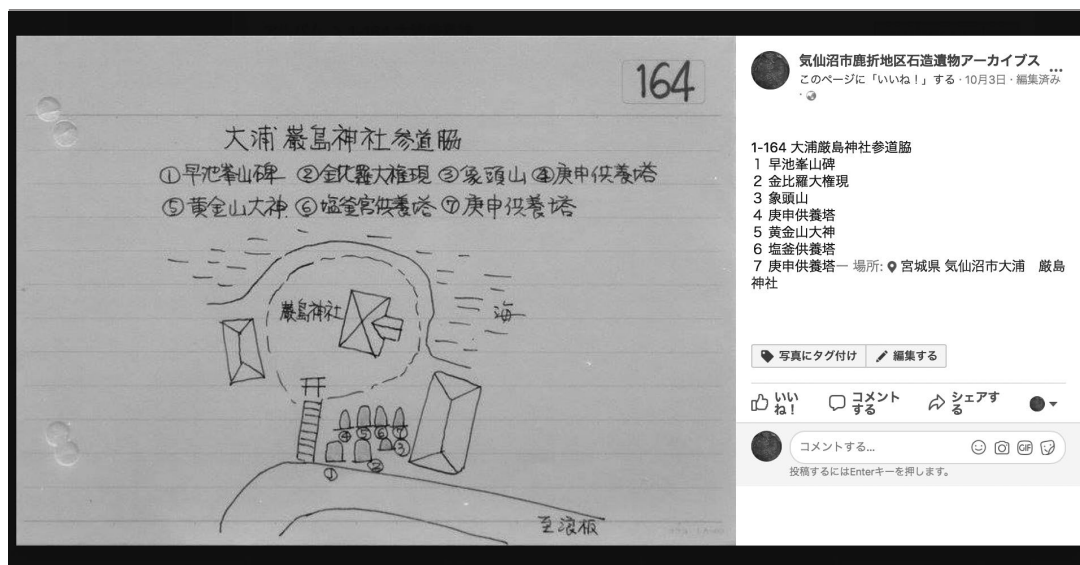


写真 19 Facebook にアップロードされた大浦巖島神社参道脇のカード

画面の左側の上には当該地域の写真が配されている。続いて「1-164 大浦巖島神社参道脇」という石碑場所名が出ている。その下の説明には、すでに記した4項目について、大浦の石碑の資料が示されている。画像が小さく見にくいだが、この場所については7件の資料が紹介される。さらに一番下には、リンクの張られたURLがある。これをクリックするとフェイスブックの「気仙沼市鹿折地区石造遺物アーカイブス」ページのアルバムにジャンプする（写真18）。

画面の左側には、画像の下に「気仙沼市鹿折地区石造遺物アーカイブス」と記されている。ここでは省略するが、このタイトルをクリックするとこのページの表紙にとぶ。フェイスブックは他のSNSと同様に、基本的には日々の記録や画像をアップロードしていく。そのため、表紙からスクロールしていくと、データはアップロード順のためにランダムにしか見えず、検索などには向かない。ただし、画面の中央のアルバムのタイトルの左上方に「アルバム> 1-164 大浦...」と記されている部分がある。このアルバムの部分をクリックするとアルバムの一覧のページにとぶことになる。アルバムについては、表示の順序を変更することが可能なため、資料ナンバーの若い順に配置していくことにしている。

大浦の画面に戻ろう。中央上のタイトルには、調査カードに準じた資料番号と場所名として「1-164 大浦巖島神社参道脇」と記されている。その下には画像が記されている。これらの画像をクリックすると各々の画像が拡大され、資料情報が紹介されることになる。例えば最初の画像は、①の「市史調査の石碑配置図のカード」である。カードに記された内容と重複するが、右側にこの場所の石碑の一覧が資料番号とともに掲載される（写真19）。次からは個別の石碑が紹介される。資料番号順に1-164-1の早池峯山碑である。画像の右側には、先の8項目に沿った内容が記されている（写真20）。

① 164-1

② 1985.10.15.



写真 20 Facebook にアップロードされた 1-164-1 の早池峯山碑とそのデータ

③早池峯山碑

④嘉永二年(己酉)

⑤1849

⑥五月吉日、講中

⑦大浦厳島神社

⑧もとはホテル望洋付近にあったと言われている。明治の廃仏毀釈の際に海中に捨てられたものを、大浦の村民が舟で運んだと言われている。石碑右側に導師八幡寺取命院、良善院、一乗院、宝珠院、唐桑村石元・吉太郎などの刻がある。

画像では、当時の状態を示す画像や、スケッチによる文字の形態や実寸の値が示されている。右側の①から⑦には、石碑に刻まれた文字情報が掲載される。加えて⑧では、カードには記録されていたが、市史の一覧表からは省かれた聞き取りによるノート部分を掲載している。早池峯山碑については、そもそも碑が大浦のものでなかったこと、廃仏毀釈という歴史的な動きの中で仏教的要素の強いものが排除されたと伝えられていることが記されている。ちなみに「ホテル望洋」は、湾を挟んで気仙沼湾の西岸の魚町の丘の上に位置していた。次に震災後に撮影した画像が続く。これは、筆者らが震災後の2014年に撮影した画像である。

①1-164-1

②2014.7.21.

③津波のために土台が外れ、元の位置からややずれている。市史調査の画像と比べると向きも変わっており、傾きが大きい。

画像情報の補足として撮影日時が記され、画像には写っていない部分についての補足説明を行っ

ている。これに続いてアルバムでは「1-164-2」の「象頭山」以下六つの石碑の調査カードと現状の画像が紹介されていく。

以上のようにグーグルマップ上に示された石碑の場所と、フェイスブックのアルバムをリンクづけることで、位置情報と石碑に関する基本情報を統合的に知ることができるはずである。

おわりに

本論では、気仙沼市の金石碑の資料のデジタルアーカイブ化を目指してきた。ここでは、東日本大震災以前の資料の再検証を行いながらデジタル化を進め、同時に震災以後の再調査のデータを加える作業を行ってきた。また、それらの資料を公開するにあたり、既存のインターネット環境をできるだけ利用する方途を目指した。

もちろん、作業の半ばのため、多くの課題が山積していることも間違いない。現状のアルバムでは、市史調査の所在地の模式図を最初に紹介している。しかし、震災前後の状況を紹介するためには震災以後の所在地の模式図も作成する必要があるだろう。あるいは、震災後に場所が移動した石碑は、図や画像を通じてその所在を示す必要がある。文字情報についても再検討が必要であると感じている。グーグルマップ上で重複するデータは、もう少しシンプルなものにしても良いかもしれない。また、タグ付けなどの機能を応用することで、より多角的な関係づけが可能かもしれない。例えば「金比羅碑」や「庚申塔」といった碑銘からの検索も模索していきたいと考えている。

もちろん、これらの資料を最初からアーカイブとして構築し、特定のサーバーで管理することが、本来は望ましいものかもしれない。そうすれば、このような様々なディマンドを可能にする仕様を組み込むことが可能だからである。だから、本論で紹介した一連の作業を、整序されたアーカイブに至るまでの過渡的な試みと捉えておいてもらっても構わない。

しかし、フェイスブックのようなSNSの利用は、単に経済的なハードルや専門性のショートカットとは異なる可能性を提示してくれる。⁽¹⁵⁾ そもそも、ここで想定するアーカイブの利用者は、限られた研究者や専門家ではなく、気仙沼の生活文化に関心を持つ一般の人々である。さらにこのような広義の文化財のアーカイブ化にも関心をもち、データの補充やそのコンテンツの拡充にも協力する人々を期待している。そのなかには鹿折地区に在住し、地元の文化財として、これらの石造遺物を捉えなおす人たちもいるかもしれない。

仮に彼らが積極的にこのアルバムに関与したいと考えた場合、ページに新たな画像をアップロードすることが可能になる。もちろん、それらの画像についての文字情報も合わせて掲載することができる。また、すでにアップロードした個々の画像についても、コメント欄に投稿することで、新たな情報を付加していけるのである。かつては現地調査において聞き取られていた伝承が、場合によっては直接、提示されることもありうる。このようにコンテンツ自体を双方向的なメディア環境の中で構築していく可能性が、SNSを通じた情報の公開を行うことで新たに浮上することになるだろう。

註

(1)——本研究の執筆にあたっては、まずカード資料の整理とそこからの問題点の抽出を萱岡と山内が行った。また、資料のデジタル化に関しては川村、萱岡、葉山が担当した。さらに全体的な問題意識については、川村、小池、葉山によるディスカッションを通じて論旨の構成を行い、川村が取りまとめたドラフトを各自が補うという形で推敲した。

(2)——例えば、宮城県名取市では、昭和の震災記念碑を市の文化財に登録している。気仙沼市の隣に位置する岩手県陸前高田市でも、2016年に19件の津波記念関連碑を市の有形文化財に指定している。

(3)——石は、他の素材に比べて相対的な持久性を有している。経年による劣化や変化も少なく、長期にわたって残る可能性が高い。それだけ多くの期間、地域の景観の一部を構成し、多くの人々の目に触れ、記憶に留められる可能性も高くなることは、ここでの検証対象としての利点となる。

(4)——資料編で金石碑は、地域の他に「石塔婆」という別カテゴリーが設けられ、51の事例が紹介されている。実は本文で紹介した未記載の南町の古い事例も、調査カード上は「石塔婆」に分類されていた。ただこのカテゴリーであっても、市史の一覧表の最古の事例は、1662(寛文2)年のものであり、石塔婆の範疇でも10年以上時期を遡る事例であることがわかる。

(5)——そもそもこの略縁起は、3世郭誉がこの時期に記したものである。同時期には郭誉自身が、相模国鎌倉天照山光明教寺から、末寺の札を修めて寺山号が認証されたことも記されており、その前後に寺の沿革が整理されたと捉えられている[村上1984]。

(6)——凡例には、この一覧表が「市史編さん室の調査時点に基づいているが、地区ごとに分け建立年代順に配列した」と記されている。また、収録された石碑の内訳としては「近世供養碑・宝塔・鐘銘・記念碑・墓碑・頌徳碑などを収録」[気仙沼市史編さん委員会編1995:450]したとされる。もっともカードを見直すと、石仏と供養碑との境界や近代以後の頌徳碑の選択などで、定義が曖昧なものもみられるようである。

(7)——しかし、これ以外にも金石碑についての拓本が取られた可能性もある。その資料もまた、現存するならば、体系的な保存が必要であるとともに、デジタル化の作業が行われるべきだろう。

(8)——国立歴史民俗博物館の小々汐での文化財レスキュー活動については、『被災地の博物館に聞く』[国

立歴史民俗博物館 2012]、『東日本大震災と気仙沼の生活文化：図録と活動報告』[国立歴史民俗博物館編2013]、『災害に学ぶ—文化資源の保全と再生』[木部暢子編 2015]に掲載された論考の他、[小池2014][葉山2015]などを参照のこと。

(9)——「象頭山」は香川県の西部、多度郡琴平町に位置する山をさす。山の中腹には金刀比羅宮が鎮座する場所であり、この名の碑は金比羅碑と同じ意味合いを持つと考えられる。

(10)——なお、庚申塔の損傷部の大半は震災以前からのものであることも、調査カードによって確認できた。カードでもこの損傷部のため、碑の建立年代などは確定できていなかった。

(11)——本論の執筆に際して、画像からもう一つ別の変化に気付かされた。それは、被災後の現地の写真で、毎回、地蔵を覆う赤い布が変わっていたことである。最初の布は布地で地蔵の前掛けによく見られる形態であり、退色がかなり進んでいる。あるいは震災以前から着せられていたものかもしれない。2番目は前掛けではなくなり、毛糸で編んだようにも見え、セーターのような外観である。さらに3番目の画像では、再び、布地の前掛けに戻っているが、明らかに新しい布が着せられている。この地蔵への配慮は、周囲を整備しようとする心意と一連のものだろう。そのような思いが託された存在としてこの地蔵と庚申塔があったことの記録を、石造遺物のアーカイブは示す可能性を有している。

(12)——本文でも記したように鹿折での市史編纂の調査での最終年月日は、1987(昭和62)年3月であり、碑の建立はその2年ほど後のことになる。

(13)——阪神淡路の震災記念物は、書籍で出版されネット上でも紹介されてきた。このマップは、2012年の12月以後、HANDS(NPO法人阪神淡路大震災『1.17希望の灯り』)のサイトを基礎としながら、神戸新聞などの新たな資料を踏まえつつ、2017年まで継続して、更新していることがわかる。

(14)——また、新たな画像をアップロードする際に日時の調整もある程度可能なため、アップロードの時期を撮影時期と同期させることも可能となり、日時からの検索も可能になる。

(15)——資料の格納については、フェイスブックと並行してグーグルフォトやインスタグラムなどの利用も考慮していた。現状では、本論でも述べたようなコメントや

投稿の容易さなどを勘案して、フェイスブックでの作業より機能の充実したサイトがあれば、そちらを利用するを行っている。これらもまだ試行の段階であり、今後、可能性も捨ててはいない。

参考文献

- 川島秀一 2012『津波のまちを生きて』富山房インターナショナル
川村清志 2013「警鐘と鎮魂―「記念碑」に込められた「知恵」の所在」『東日本大震災と気仙沼の生活文化：図録と活動報告』（葉山茂他編），pp.72-77
北原系子，卯花政孝，大邑潤三 2012「津波碑は生き続けているか―宮城県津波碑調査報告」災害復興研究（4），pp.25-42
木部暢子編 2015『災害に学ぶ―文化資源の保全と再生』勉誠出版
気仙沼市史編さん委員会編 1995『気仙沼市史Ⅷ 資料編』気仙沼市史編さん委員会
小池淳一 2014「東日本大震災と文化資源―宮城県気仙沼市小々汐地区から」『国立歴史民俗博物館研究報告』183，pp.169-186
国立歴史民俗博物館編 2012『被災地の博物館に聞く』吉川弘文館
国立歴史民俗博物館編 2013『東日本大震災と気仙沼の生活文化：図録と活動報告』，国立歴史民俗博物館
葉山 茂 2015「被災地域における生活文化保存活動の意義とその展望」『国立歴史民俗博物館研究報告』193，pp.153-185
村上森城 1984『鹿折村新風土記』自刊
目時和哉 2013「石に刻まれた明治29年・昭和8年の三陸沖地震津波」『岩手県立博物館研究報告』30，pp.33-45
森 康成 2012「青森県太平洋岸の津波記念碑周辺の過去と現在の津波災害の聞き取りからの考察：おいらせ町，八戸市，階上町」『兵庫地理』57，pp.1-14
吉田憲司 2012「記憶の継承―津波災害と文化遺産」日高真吾編『記憶をつなぐ 津波災害と文化遺産』pp.140-165，大阪：千里文化財団

川村清志（国立歴史民俗博物館研究部）

小池淳一（国立歴史民俗博物館研究部）

葉山 茂（国立歴史民俗博物館研究部）

萱岡雅光（リアス・アーク美術館，国立歴史民俗博物館研究協力者）

山内宏泰（リアス・アーク美術館，国立歴史民俗博物館共同研究員）

（2017年12月18日受付，2018年8月3日審査終了）

Reconstruction of Folk Cultural Studies Focused on Data-base of Monuments Made of Stone: A Case Study of Shishiori District in Kesen-numa City, Miyagi Prefecture

KAWAMURA Kiyoshi, KOIKE Jun'ichi, HAYAMA Shigeru,
KAYAOKA Masamitsu and YAMAUCHI Hiroyasu

This report is positioned as an essay considering the comprehensive archiving of stone artifacts in regions affected by the Great East Japan Earthquake Disaster. Our intention below is to rectify the interest concentrated on a monument commemorating the earthquake disaster, to reconsider stone artifacts in general at a phase with higher affinity to the lifeworld, and to re-break and reset the resources and the research environment which had been fragmented by the earthquake disaster, recovering and realigning their bases. This report specifically considers resources used in investigating metal and stone steles in the process of compiling the history of Kesen-numa City. Although resources related to compiling the city history were spared damage by the tsunami, they remain unorganized to this day.

As for all the metal and stone steles, honorary steles, and other stone artifacts remaining in the region, many of them have not even had their current state confirmed. While some have been reconstructed by volunteers in the area, many remain weather-beaten and neglected. Though damage by the earthquake disaster needs no mention, there are cases of rapid changes in the surroundings or threats to the existence of the stele itself due to large-scale recovery work. The pressing issue is to get an overview of the current state of these stone artifacts. What follows is an examination of digitally archiving stone artifacts and the issues involved by means of the Shishiori District of Kesen-numa City as a case study.

Key words: stone artifacts, metal and stone steles, archives, digitization, Great East Japan Earthquake Disaster